

ロンドンとケンブリッジの博物館を訪ねて

村松憲一

Kenichi Muramatsu

1 はじめに

2014 年 5 月中旬にイギリス南部に行く機会があり、ロンドンを中心にいくつかの博物館が見学できた。いずれも有名な博物館ばかりであるので、すでに訪れたことのある方も多いと思われるが、近況報告ということでお読みいただければ幸いである。

何の制限もない一人旅なので当初はレンタカーを借りて自在に動こうと計画していたのであるが、諸条件が重なり、おもにロンドン市内の散策に終わった。最大の理由はロンドン市街地に入されている車規制のための congestion charge (混雑税) である。非接触型 IC カードシステムによる乗車カード「オイスターカード」を日本で購入していったので、市内を移動するのは便利であった。移動にあたって大きな駅やバスターミナルでもトイレがほとんど無く、有っても有料 (£0.30) であるのには戸惑いを感じた。

2 ロンドン地域

A 大英博物館

THE BRITISH MUSEUM

宿泊したホテルが博物館の徒歩圏内であったため半日ずつ 2 回、ゆっくりと見学できた。半数以上が外国人観光客といわれているがいつ行ってもにぎわっている。入館料は一時期有料になったが、現在は無料に戻っている。ただ、いろいろな形で寄付金を求めている。また、他の博物館もそうであるが、館内案内パンフを有料にしている。今一番の人気はロゼッタストーンで、開館と同時に来館者が殺到する。40 年あまり前には表面以外は手で触れられたと思うが、現在はガラスケースに収められている。博物館は昨年、「日本の春画展」で話題を呼んだ。今回見学した

日本室は、北側の 4 階にある暗い印象の部屋で見学者も少なく、展示物は期待したほど多くなかった。また、ジェームズ・クックの収集した資料を含む民族資料が増えたのは実感できた。2000 年にオープンした「グレートコート」はみやげものの販売のスペースが大きくなった気がする。博物館としての収益に貢献しているそうなのでやむを得ないが、以前に比べて個性的な土産物が少なくなった印象を受けた。

B 大英図書館

THE BRITISH LIBRARY

もとは大英博物館内にあり（現在は特別展示室）、円形の室内にぎっしり書籍が並んでいたのを記憶している。現在の図書館はユーロスターの発着駅であるセント・パンクラス駅に隣接する。蔵書を閲覧するには事前の登録と許可が必要である。Sir John Ritblat Gallery にはマグナカルタを始めとする貴重な文書が展示されている（写真撮影は禁止）。入ってすぐの所に SCIENCE と書かれたコーナーがあり、1508 年のダビンチの手書きのノートをはじめ、ガリレオ、フレミング、クック、スコット、写真家のタルボットなどの文書が並んでいる。他のコーナーでは 1455 年に初めてグーテンベルグが印刷した聖書、「不思議の国のアリス」の原本やヘンデルやモーツアルトの楽譜、ビートルズ手書きの歌詞なども目を引く。アーネスト・サトウの日本コレクションは見あたらなかった。ここでは、日光を避けるため展示品の入れ替えが行われていると聞く。最近 Flickr のホームページなどで、17 世紀～19 世紀にかけての資料の図版や写真がフリーで閲覧ダウンロードできることや、著作権の切れた文書のデジタル化が進められていることなどが話題になっている。前庭には花崗岩、ドレライトなどの大きな岩石がいくつか展示してあ

り、その地質学的な解説も web で見ることができる。

C ピクトリア&アルバート博物館

Victoria and Albert Museum

大英自然史博物館の東に道路を挟んで建ち、装飾品などの展示が多い。日本室では鎧、日本刀、書画や根付けなどが見学できた。とても広い博物館なので、2 時間ばかりではごく一部しか見学できなかった。日本室は他のアジアの国々に比して狭い。

D ロンドン市博物館

Museum of London

セントポール寺院から徒歩数分のところにある大きな歴史博物館である。先史時代から現代のロンドンまでの歴史がジオラマなどをまじえて紹介されている。人骨、ゾウの歯化石なども見られる。気候変動とペストの流行に関する展示を期待して訪れたが、マイナーなイメージを与えるためか簡単に触れられていただけであった。

E 大英自然史博物館

Natural History Museum

今回一番驚いたのは来館者の多さで、ガイドブック等でも入館まで 20~30 分待ちと案内されている。土日を避けて 2 回見学したが、中庭や表通りにまで長い行列ができていた。小学生の団体がとても多く、一番人気は恐竜展示である。空中回廊でめぐる恐竜展示室は、行列をつくって見学する。とくにティラノサウルスの動刻の前は通路も狭く、小刻みに動く行列に従うしかない(図 1)。入口正面の踊り場には以前はオーウェンの像があった気がするが、現在は



図 1 ティラノサウルスの動刻

ダーウィンの像がおかれている(図 2)。標本の多さはさすがである。通路の壁に並ぶ、メアリー・アニングの採集した魚竜をはじめとする多くの魚竜やプレシオサウルス類の化石は目を見張る(図 3)。地質関係の部屋は全体に暗くして人工照明を使って展示してあるものが多い。展示物の内容ではなく“きれい”に見せることが主眼のように感じられ、この博物館に限らずいつも気になる。人気のところは恐竜と宝石展示である。鉱物・岩石展示室は木製キャビネットが並ぶ古くからの展示方法がなされているが、多くの客は中央通路を通り抜けるだけであった。ここだけで 1 時間くらいゆっくり見学したが、種類の多さや、珍しい形・色の結晶も多く、基礎的な知識があれば興味深い展示室である。その鉱物が我々の生活にどのような関わりがあるかとか、近年注目されている「鉱物と生物の共進化」というような鉱物の誕生と進化を地球の歴史のなかで考えるような話も説明されていると、もう少し足を止める人が増えるかなと感じた。2009 年に開館した研究収蔵棟ダーウィンセンター(図 4)では、ガラス越しに研究室や液浸標本の並ぶ様子が見られた。事前にガイドツアーに申し込めば内部に入ることができる。二度目に行ったときに偶然 Treasures Cadogan Gallery をのぞいた。名の通り大英自然史博物館の持つ“宝物”の展示室で始祖鳥のロンドン標本(帰国後、調べたらこれは cast とわかってがっかりしたが)、マンテルが 1822 年に発見したイグアノドンの歯化石(図 5)、ウィリアム・スミスが所蔵していた約 2 億年前イギリス最古?のアンモナイト(図 6)、ダーウィンの「種の起源」の初版本、ダーウィンが実験用に飼っていたハト、成体としては最初の(1848 年発見)ネアンデルタール人頭骨(図 7)、月の石、ウォレスの蝶と蛾の標本など 20 点余が展示してあった(時々展示品の入れ替えがある)。見学の動線からはずれ、部屋の位置は少しわかりづらい。

F 科学博物館

The Science Museum

大英自然史博物館に隣接しており、ワット、スティープンソン、ファラデー、J.J. トムソンなどのさまざまな科学史上有名な実験装置などが

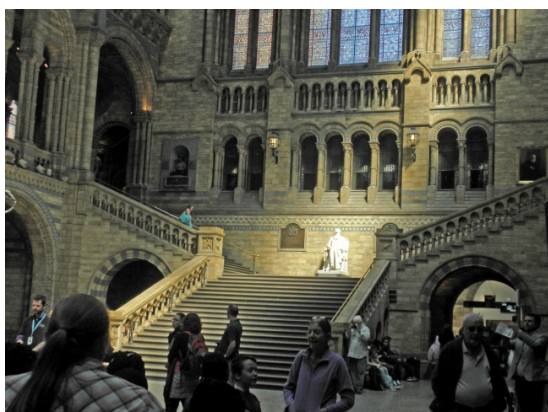


図2 入口正面のダーウィン像



図3 魚竜化石が並ぶ通路



図4 ダーウィンセンター



図5 マンテルのイグアナノドン



図6 ウィリアム・スミスのアンモナイト *Psiloceras planorbis*



図7 ジブラルタル産のネアンデルタール人 *Homo neanderthalensis*

展示されている。地質と生物分野の展示はない。予想以上に広く時間的にわずかししか見学できなかった。ここも入場無料であるが、入口で担当者が積極的に寄付金を求めている。

G ウェストミンスター寺院

Westminster Abbey

ここは博物館ではないが科学者の墓があるという点で紹介したい。ここも長い行列に並んで

入場することになる。有名なのはニュートンの墓で、身廊にある。以前来たときは、見つけることができなかったが、今回は事前に調べていったことと、見学順路が変わったのか順路に沿っていけばニュートンの墓の前に出る。入場して北側の側廊を進むと、チャールズ・ダーウィンとジョン・ハーシェルの墓があり、観光客はその上を踏みつけて通ることになる。ジョン・ハーシェルは天王星を見つけたウィリアム・ハーシェル（名盤のみある）の子で、星の等級と明るさの関係の発見や、写真のネガ、ポジという名称の提案者として知られる。そのすぐ先には「地質学原理」のチャールズ・ライエルの墓がある。身廊に入るとアフリカ探検で知られるデイヴィッド・リヴィングストンの墓の上を通してニュートンの墓に着く。その周りには、原子核を発見したアーネスト・ラザフォードの墓や、熱力学第二法則（トムソンの原理）の発見で知られるウィリアム・トムソンの名盤がある。ほかに、マクスウェルの方程式で知られるジェームズ・クラーク・マクスウェルの名盤（そこにあった墓は後に他所に埋葬）、物理学者 J. J. トムソンの墓、蒸気機関車で知られるロバート・スチーブンソンの墓などもあるそうであるが見つけれなかった。教会内は残念ながら写真撮影禁止であったが、絵はがきなどからスキャンしたニュートンの墓やダーウィンの墓は web サイトで見ることができる。

ウェストミンスター寺院はポर्टランド石やイタリアのカラーラ大理石が所々に使われている。自然史博物館内にある地質調査所の売店では、Building Stone Resources of the United Kingdom という歴史的な建造物に使用されている石材の地質に関する簡単な説明をつけた地図や、ウェストミンスター寺院、ロンドン塔、トラファルガー広場などいわゆる観光地の建物や地域に使われている石材の説明がイラストマップとともに示された Holiday Geology Guide が販売されている。

3 ケンブリッジ Cambridge

1 時間に 1 本直通の急行が出ている。複雑な料金体系のイギリスの鉄道であるが往復で

£23.70(¥4100 程度)であった。50 分ほどでケンブリッジに着く。ケンブリッジは大学と“コレッジ群”が有名であるが、4 月～6 月のイースタータームは試験シーズンのため、見学範囲は制限があった。有名な Trinity Collage の入口にはニュートンの自宅の庭に植えられていた“リンゴの木”が見られる（日本でも東大の小石川植物園で見られる）。裏側からコレッジの図書館 Wren Library に向かう並木道は、両側に芝生広場が広がるすてきな散歩道である。図書館は平日 12 時から 2 時間しか見学できないが、古い書籍を納めた書棚の間の通路に、展示ケースが並ぶ。光を避けるために覆われた厚い赤色ビロードの布を自分でめくりながら貴重な文書を黙々と見学した。ニュートンの直筆の手紙なども展示してある。King's College は礼拝堂しか見学できなかった。礼拝堂を出た所にあるギブスビルディングの外壁はジュラ系のポर्टランド石（石灰岩）を使っており、白いセメントそっくりであった。Queens' College では、その幾何学的構造から「数学の橋」と呼ばれる橋をわたった。下を流れるケム川にはパンティング（平底船での船遊び）を楽しむ観光客が多い。キャベンディッシュ研究所も訪れたかったが、暑い上に、駅からずっと歩き続け、さらに 20 分？は歩かなくてはいけないのであきらめた。ケンブリッジでは 2 つの博物館を見学した。

A 極地博物館 The Polar Museum

Scott Polar Research Institute

極地の学術調査とともに、南極点到達でアムンゼンと競った（1910 年～1912 年）ロバート・スコットとそのメンバーの遺品（図 8）や、極



図 8 スコットの遺品展示

限状態でも手放さなかった岩石などの採集品が展示されている。スコットの遺体は南極に葬られている。その他、極地探検に使われた時計や西グリーランドに住む人たちのアノラックなどが展示してある。展示室は広くはない。ニュージーランドの国際南極センターは資料展示のほかハグランドで急坂や水中を走るなどのアミューズメントが主の場であったが、ここはケンブリッジ大学地理学教室に属する 1 研究機関として、極地の気候変動、地形、そこに住む人々の生活に関する研究を行っている。日本では国立極地研究所南極・北極科学館があるが、まだ訪れたことがない。宗谷岬にあるノシャップ南極体験資料館では初期の南極昭和基地の建物・雪上車がみられた。

B セジウィック博物館

Sedgwick Museum of Earth Sciences

セジウィック地球科学博物館は 1728 年に設立された、ケンブリッジでも歴史ある博物館である。建物はいかめしく外壁にはマンモスや恐竜の彫刻が施されてある。校舎をそのまま使っているの、事前に調べていかないと入口がわかりにくい。6 億年前から現代まで、年代別に化石が展示されている。展示方法は古典的であるが、三葉虫をはじめゾルンホーフエンなど各地からの標本も多い。ミュージアムノートのような無料の説明パンフが置かれている。ダーウィンがビーグル号の航海で採集した岩石（図 9）や彼のフィールドノートも展示されている。セジウィック (1785-1873 年) はデボン紀の名の提唱者であり、地質学者としてのチャールズ・



図 9 ダーウィンの採集品

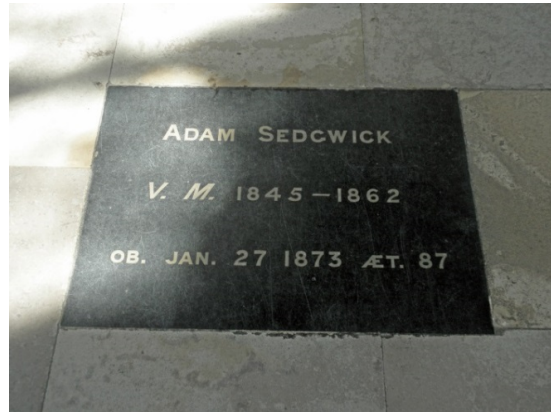


図 10 アダム・セジウィックの墓

ダーウィンの先生でもある。ビーグル号の航海の間、文通を続けたとき。Trinity Collage の礼拝堂に墓があった（図 10）。この博物館を訪れた理由の一つはここでの研究に貢献されたウィッティントン Harry Blackmore Whittington 先生（故人）がみえたからである。彼は三葉虫の研究が専門であるが、5 つ目玉のオパビニアを発表し、会場を沸かせたことで有名なバージェス動物群の再検討の第一人者である。10 年ほど前、国際生物学賞受賞で来日されシンポジウムも開かれたそうである。バージェス動物群の標本類をさがしたが *Marrella splendens*（図 11）のほかはほとんど展示されていなかった。

4 カンタベリー～ドーバー

Canterbury～Dover

1 日現地ツアーに参加し、ドーバーに行った。ここは 40 年以上前にチョーク層の観察や採集で



図 11 ウォルコット採集の *Marrella*



図 12 ドーバーのチョーク層

訪れて以来であったが、寂しい港町がリゾート地に変貌していた。港に面した崖では真っ白な上部白亜系のチョーク層が続いている（図 12）。ドーバーの崖で見られるチョーク層はチョーク層群 Chalk Group に属する後期白亜紀 Cenomanian から Santonian (100Ma~84Ma) のもので数枚の部層に分けられている。暖かな浅海に堆積したもので陸からの碎屑物はほとんど無く、円石藻からもたらされたココリスを含む。フリントを多く挟む部分もある。

今回は観光ツアーのため崖の直下までは行けなかったが（風化による崩壊が時々起きているため危険）、観光客が寝そべる海岸にはフリントの礫も多く、チョークの小さな礫も見られる。このツアーはリーズ城、カンタベリー大聖堂が主目的地であったが、リーズ城では城への通路の土手にアンモナイトが見られた（図 13）。カンタベリー大聖堂（基盤はチョーク層）のトイレの建物にはフリントが



図 13 リーズ城のアンモナイト



図 14 カンタベリー大聖堂 フリントの装飾

一杯貼り付けられており（図 14）、フランスのエトルタの街で見たのと同様な利用がなされていた。カンタベリーからドーバーへの道の両側には所々チョーク層の露頭が見られる。

5 おわりに

イギリス旅行は4度目である。今回はロンドンだけで1週間過ごしたが、まだまだ魅力有る所が一杯残っている。世界中の種子を収集、貯蔵するシード・バンク (Seed Bank) として有名なキュー植物園、ダビンチの人体解剖図をもつクイーンズミュージアム、ダーウィンの住んだダウハウスなども訪れてみたい。

ロンドンの観光客の入場者数のベスト 10 の半数以上は博物館である。これだけの人気はどこにあるのか調べたことはないが、一つは入場が無料であることが大きいと思う。リピーターを得るためにはいかに変化をつけるかであるが、常設展の展示品の入れ替えも大きな要因と思われる。所蔵する良質の標本の多さゆえにできることだとは思うが、展示書籍なども開いて見せるページを変えていくというのは面白いと思った。博物館がアミューズメントの要素が大きくなるのは賛否両論あると思うが、入館者の集まりぐあいを見る限り恐竜それも動刻が一番人気なのは間違いない。また、現生生物も含めて、骨格標本だけではあまり人気がない。剥製の展示（化石では生息時の復元模型？）の方がイメージが湧きやすいためか見物客が集まっている。また、スマホなども利用した展示（解説）方法も

考えていく時代かなあと無責任なことを考えながらの旅であった。

参考文献

リチャード・フォーティ, 2011, 乾燥標本収蔵
1 号室. NHK出版, 451p.

Derek Jones, 1968, Norman Pogson and the

definition of stellar magnitude. Astro.
Soc. Pacific LEAFLET, no.469.

Peter Toghil, 2000, THE GEOLOGY OF
BRITAIN. Swan Hill Press, 192p.

TRANSPORT for LONDON, 2014, Visitor
guide and map.

英国地質調査所 HP <http://www.bgs.ac.uk/>